＜青い目が見た日本人シリーズ＞

仕事で得たノウハウを子育てに

クレイグ・カックス

グレイグ・カックスさん（51）の経歴はユニークである。米国人だが、日本で育ち、日本人に会えば、滑らかな日本語が出てくる。

お父さんのラルフ・カックス（82）さんは、四国の高松で50年も開拓伝道をして来られ、今も現役バリバリの、知る人ぞ知る筋金入りの宣教師である。キリスト教会では、このカックス宣教師のことを聞いたことがない人のほうが珍しいだろう。

クレイグさんも、一時はお父さんと同じ宣教師を目指し、アメリカで神学校を卒業し、しばらく東京で伝道に携わったが、早くから「自分は、父親とは違って、伝道者として神さまの召しは受けなかった」と判断し、ビジネスの世界に身を投じた。

アメリカで富士通などに勤めた後、現在は、ジョンソン・コントロールズ（株）で、執行役員をされている。会社は東京都渋谷区だが、お住まいは都心を遠く離れ、空気のさわやかな軽井沢にある。そこから毎日、新幹線で通勤されているそうだ。

カックスさんの父親の役割についての話は分かりやすく、日本人の耳には新鮮に響いてくる。そして何よりもすぐに役に立つ。日本のビジネス社会で生きているカックスさんは、日本人のクリスチャンではないお父さんたちの気持ちがよく分かる。教会でも何度か父親向けに話をして好評を得た。そしていつかは、自分の考えを世俗の出版社から本として出版し、ひいてはそれを伝道に役立てたいという夢を持っている。

カックスさんの主張を簡単に言えば、「お父さんたちは、仕事で得たノウハウをそのまま子育てに生かせる」ということだ。仕事を終えたばかりのカックスさんに、仕事場のジョンソン・コントロールズ社の会議室でインタビューさせていただいた。

「日本はずいぶん変わったな」

―カックスさんが父親の役割について考え、教会などでお話をされるようになったきっかけは何でしたか？

まずは、自分に子どもが与えられたことが始まりでしたが、実際に考えを整理してまとめ始めたのは、五、六年前のことです。二十年間日本を離れていて、その頃戻って来たわけですが、「日本はずいぶん変わったな」と思いました。何が変わったかと言えば、いろいろありますが、「父親のあり方が変わった」という気がしました。

若いお父さんたちが、子どもたちを病院に連れて行ったり、電車に乗っていたりするのをよく見かけました。私が子どもの頃は、そういったことはなくて、子育てはお母さんだけの仕事でした。特に、日本の高度経済成長期は、お父さんたちはほとんど家にいなかったわけです。

ところが、今の世代の若いお父さんたちは、子育てに関心を持っている、それだけでなく時間も割くようになってきている。それが、町を歩いていると目につくわけです。

けれども、彼らと話をすると、お父さんとはどうあるべきかについて模索しているのが分かります。自分によいお父さんの模範がなかったために、どうしていいか分からないのです。

お父さん向けの本が沢山あるかと言うと、そうでもない。また、会社の同僚と「自分はどんな父親になればいいのか」とは、あまり話しません。ただ一人で頑張っているのが分かってきました。

それで、「日本の若いお父さんた

ちのお手伝いができたら……」と思って、こういうことを最近やり始めたわけです。

仕事で学んだことを、家で使わない手はない

―では、お父さんはどこから始めたらいいでしょうか？

私がいつもみなさんにお話するのは、「お父さんというのは、勉強してなるものではない。父親というのは、男性が一番向いているものであって、男性しかできないことだ」ということです。

男性は、父親に向いている。ですから、無理に勉強したり資格を取ってなるものではなくて、自分の中に父親のあり方がすでにあるのです。

なおかつ、「正しいやり方」があるわけではなくて、お父さんと一人一人の子どもとの関係はユニークで、ほかの人のやり方をまねると、かえってそのユニークさがなくなってしまうわけです。自分と子どものコンビネーションから出てくる「親子」という関係があるのです。

だから、あまり力まず、自分にあるものを補いながらやっていくのが、父親業の一つのあり方かなと思います。でも、その中でいろいろなノウハウは必要ですよね。

もう一つ言えるのは、男性はたいてい仕事をしていますよね。仕事の中でいろいろなことを成し遂げています。ですからせっかく仕事で学んだことを、家で使わない手はないと思います。

多くの男性は、「会社のやり方と家でのやり方はちがう」と思っているらしいですが、そうでもないですよね。

―具体的に言うと、どんなことでしょう？

たとえば人とのコミュニケーションの取り方について、会社ではよく言われますよね。この人は無口、この人はおしゃべり、あの人は積極的だからなどと、それぞれの個性を考えながらチームを作って、仕事を成功させていく方法を考えますよね。

なのに、会社で使うそのスキルを、なぜか自分の子どもには使わない。そういうお父さんが多いんです。やり方は分かっていると思うのですが…。

子育ては、十八年間のプロジェクト

―会社では年間の売上計画などを立てるわけですけど、家でもそのようなことをしてもいいんでしょうか？

もちろんです。子育ては、十八年間のプロジェクトなんですね。ですから、「プロジェクト管理」で考えると、始めもあればちゃんと終わりもある。

プロジェクトの成功を計るには、いろいろな計り方があるのですが、目標がない限り成功したかどうかも分かりません。十八歳になったとき、どういう人になってほしいか、ということは一人一人考えていいと思うんですね。

例えば、古い漫画の「巨人の星」に出てくる父親の星一徹は、自分の子どもにはこうなってほしいという明確な目標があって、それに向かって毎年毎年目標を達成しているかと計りながら子育てをしたわけです。あれがいいと言うわけではありませんが…。

「巨人の星」はスポーツの世界の話ですが、人格的な面で言っても、「世界的な感覚を持たせたい」とか、または、「人から好まれる人間になってほしい」、「思いやりのある親切な人になってもらいたい」など、そういう目標を掲げたら、そこまでどうやって持っていくかを、男だったらちゃんと計画を立てられるはずなんです。

「今年はこういう体験をさせるべきだ」とか「来年はこういうことを教えよう」とか。「もし失敗してもすぐには助けにいかないで、自分でしばらく考えさせよう」とか。そういう、男としては当たり前の論理がありますよね。

ですから、プロジェクト・マネージメントの観点から、成功のイメージをある程度描いて、それに対してどう進んでいくかというのは、計画できます。

これは一例ですが、会社で使っているノウハウは、子育てだけじゃなくて人生論でも同じだと思います。

通勤時間は最高の準備時間

―では、もう一歩突っ込んで、ある人が「もっとよいパパになろう」と思ったとしたら、彼は、まず何をしたらいいんでしょう？

あるお父さんが、月曜日に、会社を終えて帰ろうとしています。彼は何ができますか？

会社の例で言うと、会議がありますよね。会議を成功させたいならば、自分の考えを持って、ある程度心の準備と資料の準備をして行きますよね。何も考えないでポケーッと現れると、絶対ほかの人たちが優先されて、自分の意見だとか考えが述べられないで終ってしまいます。

会議でさえ、ある程度準備をする必要があるわけです。家では、言わば毎晩親子の「会議」があるわけです。食卓なのか、テレビを見ながらなのか、とにかくいっしょにいる時間があるわけですけど、「家庭のニーズは何なのか？　子どもたちはどんな状況、どんな心の状態にあるのか？」と考えずに帰宅すると、たぶん何もしないと思います。ですから、準備が大事なのです。

私はよく「通勤途中の半分を過ぎたら、会社のことを忘れて、家庭のことを考えるのが大事なんだ」と言います。たとえば、「今日はテストの日だったな」と思うなら、「息子がこう言ったら、こんな反応をしよう」とか、ある程度イメージを描いておくわけです。

男性は、だいたいは通勤してますから、最高の準備時間があるわけです。これは、大きなことでなくてもいいんです。

「最近、子どもと一緒に風呂入ってないな、じゃあ今晩入ろう」とか。この簡単な発想で、父親業はだいぶ進むんです。「いつもママが子どもを寝かしてるけど、今晩は私が寝かそうか」とか。「お母さんの代わりに、今日は子どもと二人でお皿を洗おう」とか。

その背後には、いろいろ原則があります。

たとえば、風呂に一緒に入るという場合ですが、親子の裸のつきあいというか、肌のふれあい（タッチ）は大事です。最近はタッチしてるかなという評価をすると、うまく行っているかいないかが分かるわけです。聖書で見ると、イエス様も癒す時に病人にふれることがありましたね。

もう一つは、二人で一緒にやることです。会社で若手を育てるときには、上司について回らせて、上司の話すことを聞きながら学ぶようにします。同じように、子どもとも何かを一緒にすることが原則の一つです。イエス・キリストも、弟子たちといっしょに行動して教えました。また、弟子たちをペアで遣わしました。

「最近は何かをいっしょにやっていないな」と思ったら、「一緒に皿洗いをしよう」とか「何かの遊びをしよう」とか。このように、この原則を今晩家庭でどう実行しようかと、準備期間の間に考えられます。

「いいお父さんかどうか」の基準

―お話を聞いていると、私たちFFJでは、「理想の父親像」などを語りがちですが、カックスさんは、「お父さんが既に持っているものを、子育てに使えば良い」と教えておられることに気づきました。もう一つは、「計画性を持ちなさい」ということですね。独り立ちするまでの目標、今年の目標、今日の目標は何か、と考え計画することによって、成功か否かを計れることを教えられました。

男性は、計画が上手ですからね。また「理想の父親像」についてですが、私は、「理想はない」と思っているんです。「いいお父さんかどうか」の基準は「自分の父親の父親業から、自分の世代で一歩でも前進できたかどうか」と考えます。

子育てをしていて、いつも「父はどうしていたかな？」と考えます。そして、普通は同じようにやってしまいます。もしくは「父にやられたあれはいやだったから、自分は絶対にやらない」とかもあるでしょう。「あの事は良かったし嬉しかったから、自分もやろう」と、意識的にせよ無意識的にせよようとしている人が多いと思います。

ですから、お父さんとして、「自分の父親より一歩進んだいいお父さん」になれたら、これは成功だと思うんです。一世代で、この父親のやり方が大幅に変わることはほとんどありえないと、私は思います。

私たちは年をとるにつれて、もっともっと自分の父親に似てくるんです。もし、嫌いであったとしても、それが遺伝なのか影響を受けたからなのか、いろいろあると思いますが…。ですから、自分の親より少しでも子どもに接する態度が良くなっていれば、これは成功ですね。

父親が、自分の父親（つまり祖父）よりも良くなろうと努力しているのを子どもが見れば、自分が親になったら、父親がおじいちゃんより良くなろうとしているのを見てるから、「自分もお父さんより良くなろう」と努力するでしょう。

この態度が家庭に染みついてしまえば、数世代ですばらしい家庭が出てくると思います。その「好循環」を作り始めることが非常に大事なことだと思うんですね。

突然、九十度、百八十度急転換して、自分の今までと違うことをできるかと言えば、そう簡単にはできるものではありません。何かの理想に対して、「自分はこれこれではないから、ダメだ」というのではなく、「父親に比べて、自分はよくやっている」というのが成功の基準だと私は思いますね。

子どもを変えたければ自分を変えること

―「子どもは、親の背中を見て育つ」と言いますが、これについてはどう思われますか？

正しいと思います。

自分のことを考えても、父の言ったことではなくて、言わなかったことが、自分の考え方、生活の仕方にしみ込んでいるんですね。ですから、子どもはことばで育つものではないんですね。パウロも、「私がキリストを見ならっているように、あなたがたも私を見ならってください」と言いました。

「子どもは、親の背中を見て育つ」というのは、生活を見て、その生活の背後にある道徳だとか、倫理だとか、考え方だとか、価値観だとかが、自然と子どものものになるということだと思うんですね。それを意識的に教えるお父さんて、ほとんどいないですよ。

「自分の限界を子どもは越えない」と思ってください。ほとんどのお父さんには、「子どもは自分より立派にしたい」という意識がすごくあります。でも、自分の背中以上には、子どもはなかなか育たないということです。「背中」以上に育ってもらうには、「背中」を変えなきゃいけないんです。自分を変えれば、子どももそのようになるわけですね。

自分が変わらないで、「君だけ変わりなさい」と言っても、ことばだけでは子どもには通用しないですね。お父さんが、煙草をスパスパ吸いながら「君は吸うなよ」と言っても、効果がないのと同じですね。

父親がカーッとなる父親ならば、「君はカーッとなるな、冷静に考えろ」と言っても効果はありません。子どもがカーッとならないようにするには、自分を変えるしかないんです。でないと、子どもは親のようになってしまいます。

だから、子育ては、子どもを育てるというよりも、「自分を育てること」にあるんですね。そこに本当の責任があります。会社でもそうなんです。

部下を抱えて、彼らを育てるには、自分が彼らの前でどのように振る舞うべきか考えますよね。その振る舞い方が彼らの模範になるわけです。会社ではいつもそう考えているのに、なぜ家ではそう考えないのか。「オレは本来こういう人間だから」と言い訳してるんですね。でもそうやって言い逃れしながら父親業をしていると、子どもも次の世代で同じことをするようになるんです。

親子は、いつでも「ルーキー同士」

―具体的な質問になりますけど、うちには14歳の娘がいますが、この子の世界と私の世界は全く違うんですが、どういう風に関わっていけばいいんでしょうか？

そういう質問には、具体的な答えを期待すると思いますが、親と子の関係は、世界で唯一つのユニークな関係です。親も子どもも世界で唯一です。

たとえば、子どもが五人いたら、その子たちと親との関係は、五通りの関係になります。だから、一番上の子とやったことが、最後の子にも通用するかというと、そうではありません。親も、第一子の時とはちがっているし、子どもも別の子だからです。

それと、「14歳の娘の親」を初めてするという意味では、親として今年はルーキー（新人の年）なんです。また、忘れがちなことなんですが、娘さんも「14歳」としてはルーキーなんです。13歳の経験は果たしましたが、14としての経験は初めてです。

野球とかで新人のことを「ルーキー」って言いますよね。そして「まだルーキーだから」って使われるようにルーキーはよく失敗します。間違いはルーキーの仕事みたいなもので、当たり前のことです。

14歳の子が間違いをおかした時に、親はすぐ怒りがちです。「なんで君は」って。ルーキーなんだから、間違うのは当たり前なんです。一方、お父さんも間違うのは当たり前です。ルーキーなんだから。

だから「お父さんもルーキーで、14歳の君を育てたことはないんだよ、初体験なんだよ、いろいろ失敗すると思うよ、君もいろいろ失敗すると思うよ、そこをお互い上手にやって行こうね」いうように「お互いがルーキーで親子をやっている」と理解し合うことが非常に大事です。

二人が協力しないと、親子ってうまく行かないものなんです。お父さんがいくら力んでも、子どもが協力しなければ、子育てはできません。子育ても人間関係です。

人間関係を作って行く中で、「オレは立派だ、お前はダメだ」という気持ちでは、なかなか成功しないものです。会社もそうですが…。

お父さんも家で仕事のことを話そう

ですから、「同じユニークなチームの中で、二人で成功しよう」という基本の考え方が大事ですね。14歳になっていきなり言い出しても困るけれど、小さい頃から言っていると、その親子関係の中で良い関係を築いていけますよね。

具体的な例で言いますと、お父さんが帰って来て、子どもと話す時、学校での様子を聞くといいですね。いじめられていないか、先生との関係はなど、その中で良いことばかりでなく、心配なニュースも入ってくるわけです。それを早くつかまないと、あとで大ごとになるかもしれませんからそういう意味でも大切です。

最初は、子どもはいろいろなことを教えてくれます。ただ、見ていると、大きくなるにつれて、お父さんに言う悪いニュースが減ってきます。「試験に失敗したよ」とか「友だちとけんかになったんだよ」とか、自然に言わなくなる。小さい頃は言ったのに。

なぜかと言うと、子どもは親に似て来たんです。つまり、お父さんは、食卓で、今日の仕事のことを絶対に言わないんです。お父さんが言わないから、子どもも言わなくなる。

お父さんだって、いやなことがあったら、家庭で話すほうがいいと思います。「失敗して社長に怒鳴られたんだよ、いやになっちゃうよ」ってね。そうしたら、子どもも話します。父親の模範に倣うんですよ。

うちの子どもたちは、私のベストフレンド。彼らの生活の中で私の知らないことは、基本的にはない、それが昔からのパターンで、なんでも話し合えるという原則を持っています。

長男は今、大学を卒業して初めての仕事に就いて一年で、その上結婚して一年でもあるので、いろいろな課題があります。ですから、自分のそういう時代を思い出して、それよりはベターな人間になってもらいたいので、私のやって来た問題点だとか失敗とかは話したりしますね。

―とても新鮮に響くお話ばかりでした。出版が実現できたらいいですね。今晩は、本当にありがとうございました。

クレイグ・カックスさん（51）は、結婚25年の妻シンディーさんと軽井沢に住む。

長男ジャイラ君（23 既婚）、長女ジリアンさん（21）はアメリカで、次女バラリさん（19）は日本で学生生活を送っている。アメリカにいる子どもたちとも、週に2～3時間は電話で話すという良きお父さんです。

ご両親　ラルフ・カックス、ステラ・カックスさん

左から、バラリー、ジリアン、ジェニファー（ジャイラの奥さん）、ジャイラ、クレイグ・カックス、シンディ（奥さん）